

# ニコライ・ネフスキーと若水の神話

宮川耕次（宮古郷土史研究会）

## 1 はじめに

### (1) ネフスキーの宮古への旅

初めにニコライ・A・ネフスキーの日本への留学の目的は日本の神道、つまり原始的な信仰の研究であった。日本の神話発生の出発点、あるいは国の中の神話的中心を見つけ、それによって神話の地域的发展の経過をある程度まで決定するつもりだった。<sup>(1)</sup>

そのための唯一の方法は、比較民俗学とその国の民族のフォークロアに依拠することであった。今生きている「物語や伝説、民衆の習わし、迷信、占いや呪術、民衆の祭りや儀礼、踊り、子供たちの遊び」などを指している。<sup>(2)</sup> また神話の原因を知るためには、まだ残っている土俗、すなわち風俗、習慣、年中行事などに捜さなければならない、とネフスキーは考えた。<sup>(3)</sup> そして宮古への旅は神話創生の中心の探究の中で、〈約束の地〉であるからだろう、とグロムコフスカヤは述べている。<sup>(4)</sup>

### (2) ネフスキーの学問の方法

ネフスキーが留学した時、東京には、ペテルブルク大学の同窓生が3人おり、ローゼンベルグが仏教哲学、コンラドは中国文化—漢文、ネフスキーは神道を研究することを話し合った。ネフスキーは、ロシアからの来日まで、ペテルブルク大学東洋学部中国・日本学科におり、そこには世界的学者が多くいた。ネフスキーは、中国語、東洋史、日本学などを学ぶ一方、実用東洋学院で現代日本語、人類学・民族学博物館でシュテルンベルグのゼミなどを受けていた。シュテルンベルグの方法は、研究の対象とする民族の言語を習得することから出発することであり、この研究方法は「民族学的言語学的方法」と呼ばれ、ネフスキーもそれに影響をうけ、実践した。

## 2 アカリヤニザガマの話

ネフスキーは、宮古で「アカリヤニザガマの話」や「美人の生まれぬわけ」「大主御嶽の由来」、多良間の「太陽と月の伝説」など、多くの神話・伝説も採集したが、ここでは、1928年に柳田國男らが発行する雑誌『民族』で発表したネフスキーの論文『月と不死』（未完）で取扱っている、「アカリヤニザガマの話」を中心に取り上げる。

### (1) あらまし

一月および天帝が、節祭の新夜に、人にスディ水、蛇にスニ水を与えて人に永久の命を与えよ、と使者のアカリヤニザガマに伝え、両桶を担いで下界へ下ろした。長旅のため足を休

め小便をしていたが、途中、どこからともなく出てきた蛇にスディ水を飲まれてしまい、仕方なく人間にスニ水を浴びせた。その報告に怒った月の神は、罰としてアカリヤニザガマに両桶を担がせ月に立たせている。

ただ神は、人を憐れみ永久の命ではなくても、多少とも若返りさせようとシツの祭日に向かう新夜に、若水を送ることになった—

## (2) ネフスキーの神話分析

ネフスキーは、この神話を根本要素と付随的要素に大別し、前者を「人間の死の起源」、後者を「脱皮する死の起源」と捉えている。さらに、このタイプの神話は世界中にあるとして、細かく紹介している。

### \*根本要素 — 人間の死の起源

- ①月、天帝は、人間に永久の命を与えるため、人を使いに出した
- ②使者の怠慢が神の慈悲を無にした
- ③使者の処罰
- ④永久の確証として月の表面に斑点がある

### \*付随的要素 — 脱皮型「死の起源」の神話

- ①蛇が人から「不死」を横取りした
- ②ある種の動物（蛇）が脱皮するのは、蘇生と不死の徴候である
- ③不死と死の象徴として、月に変若水、死水がある

### ・世界における分布

- ①世界中に「死の起源」の神話がある  
ホッテントット族（南アフリカ）  
ジェームズ・フレーザー<sup>(5)</sup>の『金枝篇』（1890～1936年で13巻からなる伝説集）にある世界の民譚を参照することを勧める
- ②「月の斑点」の動物など  
多良間、那覇、国頭に「若者」がいる  
インド・中国の兎、マライ半島のネズミ、英国の犬
- ③脱皮による「死の起源」神話は、太平洋民族に多い  
メラネシア（ニューブリテン）の蛇、日本のカニ『古語拾遺』（歴史書、807年）  
宮古のカニ、貝

## (3) 現在の宮古における分布状況

この神話は、宮古の至る所に伝承されていたものと思われる（表1）。宮古島をはじめ、池間、伊良部、多良間など各島々においても濃厚にある。また、八重山、沖縄本島、奄美など

いわゆる琉球一帯にもある（表2）。

さらに、日本本土には伝承としては見られないが、万葉集をはじめいくつかの痕跡が伺える（表3）<sup>(6)</sup>。

若水の神話は、宮古の各地域、島々に伝承されていることが窺える。中には、一つの地域に複数の伝承があるケースもある。

この神話の基本である「人が蛇とスディ水を浴びる競争をし人が負ける」という話型は、維持しつつも、それ以外の要素は微妙に違ってくる。例えば、使者ではアカリヤニザに対し、アガスジャンガムヌ、女、ひばりの鳥など、怠惰の内容は、少便に対し、居眠りをする、眠る、つまづくなど、罰の点では、月に立たされるに対し、足をしぼる、しぼるなど。神話のこのような一部変換は、地域性の違いや口承という伝承の限界、神話的思考（他の地域で伝承されている話の短紙な模倣ではなく、比喩の方法による発想の変換など）などに起因すると思われる。

表1

多良間	月と生き水	「多良間島の民話」	1981年
水納島	正月の来た道	大林太良	1992年
伊良部	雲雀と生き水	丸山顕徳	1976年
下地	月と若水	「下地町の民話」	2003年
上野	シツ祭由来	「上野村の民話」	1981年
城辺	蛇と若水	「沖縄の昔話」	1980年
池間	蛇と生まれ水	「ゆがたい第4集」	1984年
平良	「蛇と人」	「月と不死」	1971年

(別添参照 7～12 頁)

表2

八重山	生水と死水（大浜の昔話）	山里純一：民間文芸研究	1997年
沖縄	アカナーの話	「月と不死」ネフスキー	1928年
奄美	「アハビラの木と若水」	大林太良	1992年

(別添参照 12～13 頁)

表3 日本本土

	「変若水」	「万葉集」巻13
群馬県芳賀郡 岩手県九戸	「ムゲツイタチ」 (皮が剥け変わる習俗)	大林太良

(別添参照 14 頁)

(表1～3：宮川耕次作成)

### 3 内外におけるネフスキー研究

#### (1) 宮古

宮古におけるネフスキー研究は、どちらかというとなフスキーの研究を総論的に論述した形が多く、島尻勝太郎が『新沖縄文学』（1977年）に「沖縄研究の先人たち」の中で紹介している。仲宗根将二が『宮古研究』第10号でネフスキーの研究業績や行政の活動実績などを紹介している。本永清の「ネフスキーと宮古」（ネフスキー生誕120年記念シンポジウム、2012年）、国立ロシア文化研究所のエフゲニー・バクシェフの研究がある<sup>(7)</sup>。個別分野として、民俗学では岡本恵昭が平良市総合博物館紀要（2005年）の中で、ネフスキーの若水、月と不死について民俗、神話の側面からの研究、奥濱幸子の狩俣の祭祀と水（井戸）<sup>(8)</sup>、上原孝三の節祭と若水<sup>(9)</sup>などがある。

#### (2) 日本本土

折口信夫（1887～1953年）国文学者・歌人

折口信夫は、ネフスキーに万葉集や風土記などの古典を教示したが、折口が解説した万葉集辞典における「若水」について、中国起源としたことに対し、ネフスキーは宮古の事例を理由に日本古来のものと指摘し、折口も納得した。折口の「日本人の細かい感情の壁まで知った異人」というネフスキー評は有名である。

折口は、「若水の話」という論文を1927年に書き、その中で上記のいきさつを述べている。さらに折口は、すでい水については、沖縄先島では死んだ蛇がすでい水にはまったら生き返った、という観念があったと言及した。また、「すでい」は母胎を経ない誕生のことで、「生まれる」と区別した。古代信仰では、死は汚れではなく、生のための静止期間である、つまり生と死の循環として認識した、と分析した。折口は、大正10（1921）年と12年、昭和12年八重山や沖縄本島などを訪れ、研究した。

石田英一郎（1903～1968年）文化人類学者

石田は、柳田國男・折口信夫に学びつつ文化人類学を取り入れた学者であり、京都帝国大学でのネフスキーの教え子でもある。ネフスキーの論文『月と不死』の未完の論文を、石田なりに完成させた形で、同じタイトルの論文を1950年に執筆した。そして、1966年『桃太郎の母』と題する著書の中に1つの論文として収録し、扉には「ネフスキーに捧ぐ」と記している。

この論文「月と不死」は、「沖縄研究の世界的関連性に寄せて」というサブタイトルもつけられ、人間の死の起源神話や月の斑点、「蛇と月」や「水と月」などのテーマごとに、世

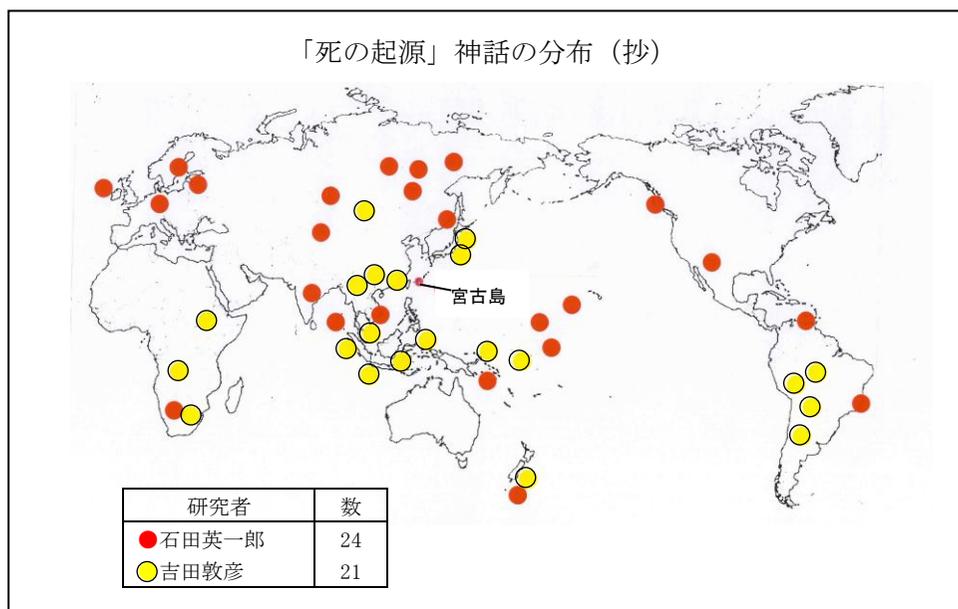
界規模から論じている。そして、「蛇と月」の関係は、旧石器時代まで遡る古いテーマであり、「水と月」の関係も動植物と水の恵み、多産な女性原理の象徴であり、先史時代まで遡るとした。

吉田敦彦（1934年生）神話学者

宮古のアカリヤニザガマ伝説は、脱皮型死の起源神話と呼ばれている、と指摘。他にはこの種のタイプとして神罰型や二神対立型、バナナ型などを紹介している。

吉田は、神話研究の立場から「死の起源」神話はホモサピエンスの地球上の歩みと同じだけ長く<sup>(10)</sup>、例えばメソポタミアの『ギルガメシュ叙事詩』は世界最古の文学作品と言われているが、その中にも死の起源神話が描かれているとする。宮古のアカリヤニザガマの話とよく似ている。

また、吉田は沖縄のこの神話は、かつて日本全体に分布しており日本古典で欠落したものを考える重要な手掛かりを与えてくれる、と評価している。<sup>(11)</sup>



2012年9月23日 宮川耕次作成

### (3)再び宮古

岡本恵昭（1941年生） 住職・民俗研究家

岡本は、2011年『宮古島の信仰と祭祀』という著書の中で、柳田、折口、ネフスキーの三氏は、沖縄、宮古の秘められた文化を発掘した人々であり、その研究の先駆者である、と評価した。その上で「沖縄学」の発展のもう一つの原動力として、宮古島の研究は注目すべき

段階に来ているとする。

岡本は、前述の博物館紀要の中で「アカリヤニザガマの話」は、死の起源神話であるがそれ以上に、シツ行事の起源も語っている、と力説している。「これは引用が長くなったが、(中略) 慶世村恒任のネフスキーへ伝達する主旨は、シツの若水の起源をいっている。」(87頁) この神話は、確かにシツ行事の起源も語っており、岡本の提起は重要であろう。

この観点に立って、アカリヤニザガマの話を再度考察していくと、2つの文脈から構成されており、前半がアカリヤニザガマの使者としての顛末の結果「人間の死の起源」、後半(補足部分)が、シツ行事の起源を謳っており、死という神秘や恐怖を和らげる1つの調和を図る機能を有していることがわかる。

#### 4 結びに

「人間の死の起源」を述べる「若水」の神話伝説に出会い、ネフスキーは、宮古、琉球、日本本土、そしてアジアなどに広がり、しかも旧石器あるいは先史時代まで遡る、普遍的なテーマを宮古の旅で発見した。その意味で所期の目的を達成したとも言える。

というのは、日本本土において折口信夫の『万葉集辞典』での「若水」にみられるように、多くの神話の起源がややもすると中国起源とされがちであったが、ネフスキーは宮古で出会った神話伝説の独自性を感じ取った。このことは、虹のことを「ティンバウ」という宮古方言に接してインド、マライ、中国、アメリカ・インディアンなどにも同じ観念が分布していることを論証しようとした論文「天の蛇としての虹の観念」<sup>(12)</sup>とも関連している。

むすびに、ネフスキーは日本古代人の信仰などを研究するなかで、アイヌ、東北、宮古、さらにはアジアにおける台湾の曹族<sup>ツォ</sup>、西夏語など、いずれも当時埋もれた「辺境」の中に、原初的で普遍的な人間の考え方を拾い上げようとした。

宮古で各分野において、数多くの資料収集を行ったが、ネフスキーはロシアに帰ってから宮古の言語研究の計画をたてるなど関心を持続していたといわれるが、周知のとおり悲劇によって実現しなかった。ネフスキーの国際性に貫かれた宮古研究の成果は、目前であっただけに残念である。

後進の人々が、その成果を少しずつでも進展させていきたいものである。

## 別添資料

表1〜3の神話・伝説（表以外に二カ所追加した ※で表示）

### 月と生き水

お月様の中に絵があるのは、すでいみず生水を神様の所から持ってきて降りていくと、蛇やその他の動物などが先になって浴び、人間は桑の実をとって食べていたために遅くなってしまつて、その生水を浴びることができず、人間は脱皮できなくなり、蛇は脱皮するという話。

### 多良間

あの生水を担いだ女の天使の絵が月に残っているという話です。

「むかしくシツ節祭の夕に天から水を下ろして下されたら「人から先に浴びろ」との事でしたが、人間がまけて蛇が先になつて浴びたので、人間は仕方なしに手と足を洗つた。だから爪だけがいくらぬいても、つぎからつぎへと生へて来るのである。蛇は死んでもどんく蘇生してゆけるのである」と。

※『月と不死』（ニコライ・ネフスキー）一九七一年

### 正月の来た道

### 水納

昔天の神様が、このシツミズをもつていって、人間に浴びせるようにしなさいと、ゲアントという鳥を使に出された。しかしゲアントは餓鬼なので、島のあぜにタギス（野いちご）があるのをみつけ、うまそうだなと思つて地上に下りてしまい、もつてきた大事な水をあぜに置いて、タギスを食べてしまった。そこへ蛇やかげがやってきて、この大事な水を浴びてしまった。そのため人間が浴びようと思つたら水が非常に少なくなつて、手足の指先しかつけることができなかつた。そのため蛇やかげは何回も何回も皮をぬぐことができるが、人間は爪ばかりが生えかわるだけであつた。ゲアントは神様に責任を問われ、足を縛られたので、それからはゲアントの足は小さくなつたという。ゲアントはひばりのことらしい。

## 雲雀と生き水

### 伊良部

青大將は生まれて千年、人にみられずに済めば天に昇って竜のなれる。千年経ったので天に昇るが、その途中、草刈り男にみられてしまう。その草刈り男に「もし私に会ったことを他人に漏らさなければ、あなたに宝物をあげよう」と人に告げないことを約束させる。蛇はそのまま天に昇り竜となり、神様になる。約束を守り通した男に宝物をおろす。昔、人間は脱皮していた。それでひばりを使い「これをあの男に届けて、人間が脱皮するとき、きれいにしなさい」といって池の水をもたせる。ところがひばりはもつてくる途中つまずいてその水をこぼしてしまい、それが蛇にかかる。その後蛇は脱皮し、人間は脱皮しなくなった。

### 月とすず水

昔、二つの桶に、一つはスデ水、もう一つはスニ水を入れて担いできて、疲れたもんですから木の影で一休みしていると、そこで居眠りしてしまった。居眠りをしているうちに蛇が出てきて、スデ水の入っている桶に入ってその水で浴びていた。それで蛇が浴びたもんだから、どうしようかと、アガスジアンギアム又は心配して困ってしまった。「気の毒だけど、人間にはスニ水を浴びせておこう。」と、人間にスニ水を浴びせた。

そうしたもんだから、それから人間は死ぬようになるし、蛇は脱皮していつまでも若返るといふ話です。それで、アガスジアンギアム又は神様から罰をうけて、無期懲役としていつもお月さまの表で、両方に桶を担いで立たされている。

### 下地

シツ祭りをシツぶうすと言うんです。そのシツの夜には、アガスジアンギアム又は天から杓でスデ水を汲んで下界に撒いている。それで、シツの日は、朝早く起きて井戸の水を汲んできて、それを浴びたらその年は病気をしないで健康に恵まれるということをお聞きしております。

### シツ祭由来（蛇と生き水）

そうだね、昔はね、人間は死ぬことはなかったそうです（その頃の人間は）。寝ているとサンム草が生えていたそうです。サンム草が生えていましたので、草を刈りようと思って、鎌を振るうと、

### 上野

「こらっ、私なんだぞ、痛い、私だぞ」

と言っていたそうです。

このようにしていたのですが、このシツの水を蛇が浴びてしまい、脱皮して行ってしまったので、蛇が浴びた残りの水を人間が浴びたので、人間は蛇に負けてしまったそうです。

それから人間は、死んでいくようになったそうです。

### 城辺

#### 蛇と若水

昔、人間は蛇のように皮を脱いで若返っていた。蛇は一代限りのものであった。ある時、人間と蛇が賭をした。節祭りの日に平良市のムズカ川に早くいって水を浴びたほうが皮を脱いで若返るようにしようということになった。節祭りの日の朝早く人間が川に水浴びにいくと、すでに蛇が水を浴びていた。それ以後人間は死に、蛇は皮を脱ぎ若返るようになった。

## 蛇と生き水

天の神さまが、巢出水すでみす、死水すにみすを持って島に降りるように、この巢出水は人間に浴びせなさい。死水は蛇に浴びせなさい、と言つて持たせてやった。ジャブジャブと持つて来た時に、中ほどまでやってきて、途中疲れて、持てないほど疲れていた。そこに眠つてしまい起き出して見ると、

その巢出水には、蛇が入つて浴びているのだそうだ。

「あ、なんと不思議なことか」

と言つて『どうしたもんか』と思索して、途中もどつて天の神さまのところに行きかけた。しかし、自分の罪ではない。と思つたりしたが、また、そうでもないと思つたりした。

けっきょく、そのまま持つて降りることにした。それで人間には死水を浴せた。それからまた、その巢出水は蛇に浴せたそ  
うだ。

## 池間

また天に昇つて行つて、天の神さまに、

「私は、こんな、こんなことがあつて、このようにしてきたよ」と言つと、

「お前は、私の言ったことを守らなかつたから、罰しないといかん」

と言つて、それから、その太陽の真中の黒点はあるのだそうだ。その黒点は、その巢出水、死水を持つて行つた人が罰されて立っているのだと言つ話だ。

※雲雀と生き水ひばり

むかし、むかしの話に、鳥のうちでも、大きな鳥がいたそうです。それは雲雀なんだが、鳥の中でも一番大きな鳥だったという。

ある日、天の神さまが雲雀に、巢出水を持ってきなさい。と雲雀と蛇に命令した。

「巢出水を持って天に昇ってきなさい」

と天の神さまの命令だそう。

それで、その雲雀は、

「はい」

と言って、その蛇と一緒に昇って行ったろう。天の神さまの所に昇って行く途中、その蛇が、雲雀の足にビーンツと巻きついた。すると、その雲雀は持っていた巢出水を、その蛇に浴びせてしまった。

その巢出水をね。

浴びせてしまって、それで天に昇って行つては、

「蛇が、こんなに私の足に巻きついたので、私は水を捨ててしまった」

と天の神さまの所に行くと、このように言った。すると、神さまは、

「お前は蛇の悪知恵に負けたのだ。それで蛇に巢出水を浴びせてしまったら、蛇は巢出るようになる。お前は殺してもあきたらないが、殺して捨てても仕方ないからもう、絞り上げることにしよう」

と絞り上げたそう。一番大きかった雲雀は、天の神さまが絞り上げて見ると、鳥の内でも小さな鳥になった。ほんとにおに小さな雲雀なんだね。

平良

「蛇と人」

「節祭シツの夕には蛇より先に人が若水を浴びて居つたから、人が若返り、蛇は若返らずに居つた。処がある年、蛇にまけて人が後で若水を浴びたから、蛇が若返り人は若返らぬ様になつたといふ。」

(表題「蛇と人」は筆者が命名)

生水と死水

昔、この世の中に、生物がたくさんおり、生物がこのように暮らしていたということだが、その中で、最も毒を持ち、この世の中の動物を殺してしまう毒蛇がいたようだ。これがハブというものさ。

そういうことなので、神様が、

「どうにかして、この毒蛇は取り除かなくては」と、このように考えて、神様が、一つの容器には死水を入れて置き、もう一つの容器には生水を入れて置いたそうだ。

そうして、神様の考えは、

「ぜひとも、この毒蛇に死水を浴びせて、早く殺してしまわないといけない」と、こういうことをたくらみ、死水を造って、こうして準備されていたようだが、このハブは、早目に、自分の尾で生水を浴びて去ってしまい、

それで残りの人間を初め生物たちは、仕方なく、皆、死水を浴びていたそうだ。

そういうわけで、仕方なく、人間の他全て(の生物)は死水を浴びて、生物は最終的には死んでいかねばならないという昔話があるよ。

アカナー アカナー

もし、もし、アカナー、アカナー

何処へ行くのか、アカナー

北の海へ

蟹取りに

私が行くのよ

蟹取つてどうするか、アカナー

私の姉様に呉れるのよ

お前の姉様は誰だい

十五夜のお月様だ

## 沖繩

## 奄美

太古には人は不死であった。というのはチンチン鳥（何の種類の鳥か不明）が毎年元日の朝、神の使者となって天から若水をもってきてくれたからである。人はこの若水で顔を洗うと、みな若返って老いを知らなかったということである。しかるにある年チンチン鳥が天から若水をもってくる途中、アハビラ木（サルスベリのことか）に休んでいると、鳥がチンチン鳥を食おうとして追っかけてきたので、チンチン鳥が逃げようとする途端、若水をこぼしてしまった。それ以来人間は若水を得ることができず、死ぬようになってきたが、そのかわりアハビラ木は若水をかけられたので、毎年若返る（樹の皮が剥けること）ようになったとのことである。

## 本土

天橋も 長くもがも 高山も 高くもがも 月読の 持てる変若水い取り来て 君に奉りて 変若得しむもの

万葉集卷十三

群馬県芳賀郡では六月朔日のことをムゲツイタチという。この日麵類を食べて皮を剥くといい、あるいはこの朝水に尻をつけて逆さになって見ると、人間の皮がクワの木に引つかかっているのが見えるというが、だれもそんなことを試してみるものはいないという。

## 本土

岩手県九戸くのへでは六月一日をムケゼツクといい、この日はクワの木の下でへビが皮を脱ぐとっている。同県下閉井郡しもへいでは虫けらの皮剥けを祝う日ともいう。しかしこの日に皮がむけるのはへビや虫だけではない。同県東磐井郡いわいではムケノツイタチには人の皮もむけるといい、それを見ると死ぬなどという話が残っている。また山形市付近では六月一日のことをムケビと呼び、人間の皮がむけ変わるから、きれいになるようにイモ汁を食うのだという。

脱皮信仰は欠けているが、福島県石城郡いわきでは六月朔日をムケカエリツイタチと称しているのは、この名前から見て同様な信仰がかつては存在したことを考えさせる。この日に歯固め餅を食べることは岩手県九戸郡のムケゼツクの場合と同様である。

- 
- (1) ニコライ・A・ネフスキー『宮古のフォークロア』（リヂア・グロムコフスカヤ編）砂子屋書房 1998年、348頁
  - (2) 前掲注（1）
  - (3) N・ネフスキー『月と不死』（岡正雄編）平凡社 1971年 23～24頁
  - (4) 前掲注（1）351頁
  - (5) イギリスの人類学者（1854～1941年）王殺しや死して甦る神といった考えが有名。
  - (6) 『水の神話』吉田敦彦 1999年
  - (7) 「ニコライ・ネフスキーと沖縄・宮古島」2009年
  - (8) 「宮古狩俣村落（スマ）の神行事を通して」『祭祀と環境』沖縄県教育委員会、1998年
  - (9) 「節祭りー若水を汲む」（研究ノート）宮古島市総合博物館紀要第14号、2010年
  - (10) 大林太良・伊藤清司・吉田敦彦・松村一男共著『世界神話事典』角川選書375、2005年、128頁
  - (11) 吉田敦彦『水の神話』青土社、1999年、40頁
  - (12) 前掲（3）342頁